

甲乙

泉鏡花

青空文庫

先刻は、^{さつき}小さな女中の案内で、雨の晴間を宿の畑へ、家内と葱を抜きに行つた。……料理番に頼んで、晩にはこれで味噌汁を拵^{こしら}えて貰うつもりである。生玉子を割つて、且^かつは吸ものにし、且つはおじやと言う、上等のライスカレエを手鍋で拵^{あつら}える。……腹ぐあいの悪い時だし、秋雨もこう毎日降^{ふりつづ}続いて、そぞろ寒い晩にはこれが何より甘味^{うま}い。

畑の次手^{ついで}に、目の覚めるような真紅^{まっか}な蓼^たの花と、かやつり草^{そう}と、豆粒ほどな青い桔梗^{ききよう}とを摘んで帰つて、硝子杯^{コップ}を借りて卓子^{ちやぶだ}

台いに活けた。

……いま、また女中が、表二階の演技場で、万まんざい歳がはじまるから、と云つて誘いに來た。——毎日雨ばかり続くから、宿でも浴客、就なかんずく中、逗留客にたいくつさせまい心づかいであろう。

私はちようど寝ころんで、メリメエの、(チユルジス夫人)を讀んでいた処だ。真ほんとう個はこの作家のものなどは、机に向つて拝見をすべきであろうが、温泉宿の昼間、搔かいまき卷を掛けて、じだらくで失礼をしていても、誰たれも叱こいごと言をいわない処がありがたい。

が、この名作家に対しても、田舎まわりの万歳芝居は少々憚はばかる。……で、家内だけ、いくらかお義理けんを持参で。——ただし煙草たばこをのませない都会の劇の義理見けんぶつに切符おしを押しつけられたような氣

味の悪いものではない。出来秋できあきの村芝居とおなじ野趣に對して、

私も少からず興味を感じる。——家内はいそいそと出て行つた。

どれ、寝てばかりもおられまい。もう二十日はつかすぎ過だし少し稼ごう。

——そのシャルル九世くせい年代記を、わが文化の版、三馬さんばの浮世風呂

にかさねて袋棚にさしおいた。——この度胸でない仕事は出来

ない。——さて新しい知己あ(その人は昨日この宿を立つたが)秋

庭俊きばとしゆき之君の話きを記そう。……

中へ出る人物は、芸妓げいしやが二人、それと湘南の盛場さかりばを片わき

へ離れた、蘆あしの浦辺うらべの料理茶屋の娘……と云うと、どうも十七八、

二十はたちぐらいまでの若々しいのに聞えるので、一寸ちよつと工合が悪い。

二十四五の中年ちゆうどし増で、内証ないしやうは知らず、表立つた男がないの

である。京阪地かみがたには、こんな婦人を呼ぶのに可いいがある。(とうはん)とか言う。……これだと料理屋、待まち合あいなどの娘で、円ま相さ應しつかしいのがあつた、娘むすめぶん分ぶんと云うのである。で、また仮に娘分ふさわとして、名はお由紀ゆきと云うのと、秋庭君とである。

それから、——影のような、幻のような、絵にも、彫刻にも似て、神のような、魔のような、幽霊かとも思われる。……歌のははき木ぎのような二人ふたりの婦おんながある。

時は今年の真夏だ。——

これから秋庭君の直話じきわを殆どほとんそのままであると云つて可いい。

「——さあ、あれは明治何年頃でありましょうか。……新橋の芸げ妓いしやで、人気と言え、いつもおなじ事のようでございますが、えはがき絵端書や三面記事で評判でありました。一対の名妓が、さいしやうし罪障消滅ようめつのためだと言います。芸妓の罪障は、女郎の堅気も、女はおなじものと見えて、一念発起、で、廻かいこく国の巡礼に出る。板橋から中仙道なかせんどう、わぎと木曾の山路の寂さびしい中を辿たどって伊勢大和めぐり、四国まで遍路をする。……笈おいも笠も、用意をしたと、毎日のように発心ほっしんから、支度したく、見送人のそれぞれまで、続けて新聞が報道して、えらい騒ぎがありました。笈おい摺ずる菅笠すげがさと言え

ば、極きまつた巡礼の扮装いでたちで、絵本のも、芝居で見ると、実際と同じ姿でございます。……もしこれが間違つて、たとい不ふ図とした記事、また風説うわさのあやまりにもせよ、高尚なり、意気なり、婀娜あだなり、帯、小袖をそのまま、東京をふツと木曾へ行く。……と言いう事であつたとしますと、私の身体からだはその時、どうなつていたか分かりません。

尚なおその上、四国遍路に出る、その一人が円鬚まるまげで、一人が銀杏ちようがえし返かへだつたのでありますと、私は立たち処どころに杓しやくを振ふつて飛出とびだしたかも知れません。ただし途中で、棧道さんぼしを踏ふみずべみすべに御お嶽たけおろしに吹ふきとばとば飛とされるやら、それは分わらなかつたのです。御存おんぞんじとは思おもいますが、川越喜多院かわごえきたいんには、播粉木すりこぎを立掛たてかけて

置かないと云う仕来りしきたがあります。縦にして置くと変事がある。むかし、あの寺の大僧正が、信州の戸隠とがくしまで空中を飛んだ時に、屋の棟を、宙へ離れて行く。その師の坊の姿を見ると、ちようど台所で味噌を摺すっていた小坊主が、播粉木を縦に持ったまま、破は風から飛出とびだして雲に続いた。これは行ぎようりき力が足りないで、二ふた荒山やまへ落おつこちたと言いうのです。

私にしても、おなじ運命かも知れません。別嬪べっぴんが二人、木曾街道を、ふだらくや岸打つ浪と、流れて行く。岨道そぼみちの森の上から、杓しやくを持った金きん鉦ぼたんが団栗どんぐりころげに落ちてのめつたら、余よ程ほど……妙なものが出来たろうと思います。

些ちと荒唐無稽に過ぎるようですが、真ま実じつで、母はは可な懐つかく、妹

恋しく、唯心も空そらに憧憬あこがれて、ゆかりある女と言え、日とも月とも思う年頃では、全く遣やりかねなかつたのでございます。——幼いうちから、孤みなしごだつた私は、その頃は、本郷の叔父のうちに世話になつて、——大学へ通つていました。……文科です。

幸さいわいですか、如何いかにだか、単に巡礼とばかりで、その芸妓たちの風俗から、円鬚と銀杏返と云う事を見出さなかつたばかりに、胸を削おるよおもうな思おもいばかりで済すみました。

もとより、円鬚と銀杏返と、一人ずつ、別々に離れた場合は、私に取つて何事もないので。——申すまでもない事で、円鬚と銀杏返を見るたびに、杓おを持つて追掛おけるのでは、色いろ情きち狂がいを通り越して、人間離れがします、大だい道どう中なかで尻尾へを振る犬だと隔へりは

ありません。

それに、私が言う不思議な婦人は、いつも、円鬘おんなに結つた方は、品がよく、高尚で、面長おもながで、そして背がすらりと高い。色は澄んで、滑らかに白いのです。银杏返の方は、そんなでもなく、少し桃色がさして、顔もふつくりと、中肉……が小肥りこぶとして、些ちと肩幅もあり、較べて背が低い。この方が、三つ四つ、さよう、……どうかすると五つぐらい年とし紀下したで、縞しまのきものを着ている。円鬘のは、小紋か、無地かと思う薄うす色いろの小袖です。

思いもかけない時、——何処と言つて、場所、時を定めず、私の身を取つて、彗ほう星きぼしのように、スツとこの二人の並んだ姿の、あらわ顕れるのを見ます時の、その心持と云つてはありません。凄いと

も、美しいとも、床ゆかしいとも、寂さみしいとも、心細こころこいとも、可おそろ恐ろしいとも、また貴たかいとも、何とも形容が出来ないのです。

唯今も申した通り、一人ずつ別に——二人を離して見れば何でもありません。並んで、ずっと来るのを、ふと居る処を、或あるは送おくるのを見ます時にばかり、その心持がしますのです。」

著者はこれを聞きながら、思おもわず相さしむか対たいつついて、杯さかずきを控かえた。

——こう聞くと、唯その二人立たち並ならんだ折のみでない。二人を

別々に離しても、円まるまげ鬚げの女には円鬚げの女、銀杏返いちょうへの女には銀

杏うがえし返への女が、他ほかに一ひと体つずつ影かげのように——色あり縞しまある——

影かげのように、一人ずつ附ついて並んで、……いや、二人、三人、五人、七人、おなじようなのが、ふらふらと並んで見えるように聞

き取られて、何となく悚然ぞつとした。

三

「はじめて、その二人の婦おんなを見ましたのは、私が八つ九つぐらいの時、故郷の生家で。……母親の若くてなくなりました一周忌の頃、山からも、川からも、空からも、町に霽みぞれの降りくれる、暗い、寂さみしい、寒い真夜中、小学校の友だちと二人で見ました。——なまけものの節季せつきばたらきとか言つて、試験の支度したくに、徹夜で勉強をして、ある地誌ちしりやく略を読んでいました。——白山はくさんは北陸道第一の高山にして、郡の東南隅とうなんぐうに秀ひいで、越前えちぜん、美濃みの、飛騨ひだに跨またが

る。三峰あり、南を別山とし、北を大汝嶽とし、中央を
ごぜんがみね 御前峰とす。……後にうしろ 劍峰あり、その状、五劍を植るが如
し、皆四時雪を戴く。山中に千仞瀑あり。御前峰の絶壁に懸る。
びじよざか 美女坂より遥はるかみに看るべし。しかれども唯飛流ひりゆうの白雲の中より
おつ 落るを見るのみ、真に奇観なり。この他美登利池、千歳谷——
と、びしよびしよと冷く読んでいと、しばらく降止んで、ひつ
そりしていたのが急にぱらぱらと霰あられになつた。霰……横の古襖の
やぶれめ 破目で真暗な天井から、ぽつと燈明あかりが映ります。寒さにすくん
で鼠も鳴かない、人ツ子の居ない二階の、階子段はしごだんの上へ、すつ
とその二人の婦おんなが立ちました。縞の銀杏返の方が硝子台がらすだいの煤すす
ランプ けた洋燈を持っています。ここで、聊いささかでも作意があれば、青い蠟

燭と言いたいのですが、洋燈ランプです。洋燈ランプのその燈ひです、その燈で、
 円鬚おんなの婦の薄色の衣紋えもんも帯も判然はつきりと見えました。あツと思うと、
 トントン、トントンと静しずかな蹠音あしおととともに階子段を下りて来る。
 キヤツと云つて飛上とびあがった友だちと一いつしよ所に、すぐ納戸の、父の
 寝ている所へ二人で転り込みました。これが第一時の出現で、小
 児どもで邪氣のない時の事ですから、これは時々、人に話した事があ
 りますが。

翌年でしたか、また秋のくれ方に、母のない子は、蛙かえるがなくなか
 ら帰ろ、で、一度別れた友だちを、尚なおさみしさに誘いたくつて、
 町を左隣家ひだりどなりの格子戸の前まで行くと、このしもた屋は、前町まえまち
 の大商人おおあきんどの控屋ひかえやで、凡およそ十人ぐらひは一側ひとかわに並んで通るこ

との出来る、広い土間が、おも屋まで突抜つぎぬけていると言いうのです
 が、その土間と、いま申した我家の階子段とは、暗い壁ひとえ一重にな
 つていました。

おさな

稚い時は、だから、よく階子の中段に腰を掛けて、壁越に、そ
 の土間を歩ある行く登音や、ものいう人声を聞いて、それをあの何年
 何月の間あいだか、何処までも何処までもほり抜くと、土一皮下つちひとかわしたに人
 声こゑがして、遠くで鶏にわとりの鳴くのが聞えたと言いう、別の世界うちの話声こゑが
 髣髴ほうふつとして土間から漏れる。……小児こどもごろに、内うちの階子段は、
 お伽話あやしの怪い山あやしの、そのまま薄暗い坂でした。——そこが、いま
 の隣家となりの格子戸から、間まを一つ框かまちに置いて、大な穴おおきのように偶ふと
 見みえました。——その口へ、円まるまげ髻おんなの婦おんながふつと立つ。同時に並

んでいた銀杏返いちようがえしのが、腰を消して、一寸足もとの土間へ俯ちよつと向きつむました。これは、畳を通るのに、駒下駄こまげたを脱いで、手に持つのだ、と見る、と……そのしもた家へ、入るのではなくて、人の居まない間を通とおりぬぬ抜ぬけに、この格子戸へ出ようとするので、何故か、そう思うと、急に可お恐そろろしくなつて、一度、むこうへ駈かけ出だして、また夢中で、我家へ遁にげ込こんで了しまいました。

二年ばかり経つてからです。父のために、頻しきりに後妻を勧めるものがあつて、城下から六七里離れた、合ねむ歡むの浜——と言う、……いい名ですが、土地では、眠いそうな目めをしたり、坐いねむり睡むをひやかす時に（それ、ねむの浜からお迎むかえが。）と言います。ために夢見る里のような気がします。が、村に桃の林があつて、浜の白砂しらすな

へ影がさす、いつも合歡の花が咲いたようだと云うのだそうです。その浜の、一向寺いっこうでらの坊さんの姪が相談の後妻になるので、父に連れられて行きました。生れてから三里以上歩行あるいたのは、またその時がはじめてです。母おつかさんが出来ると云うので、いくら留とめられても、大きな草鞋わらじで、松並木を駈けました。庵いおりのような小寺で、方丈の濡縁ぬれえんの下へ、すぐに静しずかな浪が来ました。尤もつともその間あいだに拾うほどの浜はありません。——途中建場茶屋たてばぢややで夕飯は済みました——寺へ着いたのは、もう夜分、初夏はつなつの宵なのです。行燈あんどんを中にして、父と坊さんと何か話している。とんびずわりの足を、チクチク蚊がくいます、行儀よくじつとしてはいられないから、そこは小兒こどもで、はきものとも言わないで縁からすぐに浜へ出まし

た。……雪国の癖に、もう暑い。まるツ切風きりがありません。池か、湖かと思う渚を、小児ばかり歩行いていました。が、月は裏山に照りながら海には一面に茫ぼうと靄もやが掛かつて、粗い貝も見つかからないので、所在なくて、背丈に倍ぐらいな磯そなれまつ馴な松まつに凭より懸かつて、入いりうみ海うみの空、遠く遙々はるばると果はてしも知れない浪を見て、何だか心細さに涙ぐんだ目に、高く浮いて小船せうせんが一艘——渚から、さまで遠くない処に、その靄の中に、影のような婦おんなが二人——船はすらすらと寄りました。

ふなべり
舷かたひじに手首を少し片かたひじ肱ひじをもたせて、じつと私を視たのが円鬚みの婦おんなです、横に並んで銀杏返ぎんぎんのが、手で浪を搔かいていました。その時船は銀ぎんの色して、浜さつは颯さつと桃色に見えた。合歡ねむの花の月夜です。

——（やあ父さん——彼処あそこに母さんと、よその姉さんが。……）

——後々のちのち私は、何故、あの時、その船へ飛込とびこまなかつたらうと

思う事が度々たびたびあります。世を憐むはかな時、病に困くるしんだ時、恋に離れ

た時です。……無論、船に入ろうとすれば、海に溺れたに相違な

い。——彼処に母さんと、よその姉さんが、——そう言つて濡縁

に飛びついたのは、まだ死なない運命だつたらう、と思ひます。

言うまでもありませんが、後妻のことは、其処でやめになりま

した。

可厭いやな、邪慳じゃけんらしい、小母さんが行燈あんどんの影に来て坐つてい

ましたもの。……」

俊之君は、話しかけて、少時しばらくおもひ思にふけたようであつた。

「……その後、時を定めず、場所を^{えら}択ばず、ともするとその二人の姿を見た事があるのです。何となく、これは前世から、私に^つ纏^{きまと}っている、女^{じょたい}体の星のように思われます。——いえ、それも、世俗になずみ、所帯に煩わしく、家内もあるようになってからは、つい、忘れ^{がち}勝^{かち}……と言うよりも、思^{おも}出^{いだ}さない事さえ稀で、偶^{たま}に夢に^み視^みて、ああ、また（あの夢か。）と、思うようになりました。

——^{ところ}処^{ところ}が、この八月の事です——

寺と海とが離れたように、間^まを抜いてお話ししましょう。が、桃のうつる白^{しろ}妙^{たえ}の合歡の浜のようではなく、途中は^{びようぼう}渺^{びようぼう}茫^{ぼう}たる沙漠^{さつぼく}のようで。……」

四

「東京駅で、少し早めに待合まちあわして。……つれはまだかと、待合室からプラットホオムを出口の方へ掛かつた処で、私はハツと思ひました。……まだ朝のうちだが、実に暑い。息苦しいほどで、この日中が思遣おもいやられる。——海岸へ行くにしても、途中がどんなだろう。見合せた方がよかつた、と逡巡しりごみをしたくらいですから、頭脳あたまがどうかしていはしないかと、危あやぶみました。

あの、いきれを挙げる……むツとした人混雑ひとごみの中へ——円鬚まるまげの、銀杏返いちようがえしのと、二人の婦おんなが夢のように、しかも羅うすもので、水

際立つて、寄つて来ました。(あら。)と莞爾にっこりして、(お早う。)
)と若い方が言うのと、年上の上品なのは、一寸俯目ちよつとふしめに頷うなずくよ
 うにして、挨拶さつぎしました。」

——先刻さつきは、唯、芸妓げいしやが二人、と著者は記しるした。——俊之君
 は、「年増と若いの。」と云つて話したのである。が、ここに記
 しつつ思うのに、どうも、どつちも——これから後のちも——それだ
 と、少なくとも、著者がこの話についてうけた印象に相当しない。
 更あらためて仮に姉と、妹としようと思う。……

「私は目が覚めたように、いや、龍宮から東京駅へ浮いて出た気
 がしました。同時に、どやどや往来ゆききする人脚ひとあしに乱れて二人は、
 もう並んではいません。私と軽い巴ともえになつて、立停たちどまりましたの

で。……何の秘密も、不思議もない。——これが約束をした当日の同伴なので。……実は昨夜、或場所で、余りの暑さだから、何処かいき抜きに、そんなに遠くない処へ一晩どまりで、と姉の方から話が出たので、可^よかろう、翌^{あした}日にも、と酒の勢^{いきおい}で云ったものの、用もたたまっていきますし、さあ、どうしようか、と受けた杯^{よど}を淀^{よど}まして、——四五日経つてからの方が都合は可^いいのだがと、煮^{にえき}切らない。……姉^{おた}さんは温^{おだ}和^{やか}だから、ええええ御都合のいい時で結構。で、杯^{はいせん}洗^{せん}へ、それなり流れようとした処へ、（何の話？……）と、おくれて来た妹が、いきなり、（明日^{あした}が可^いい、明日^{あした}になさい、明日^{あした}になさい、ああこう云つてると、またお流れになる。）そこで約束^{きま}が極^{きま}つて、出掛ける事になったのです。——

昨夜ゆうべの今朝ですもの、その二人を、不思議に思うのが却かえつて不思議なくらいで。いや自然このみの好は妙なものだ、すらりとした姉の方が、細長い信玄袋を提げて、肩幅の広い、背の低い方が、ポコンと四角張つて、胴の膨れた鞆を持つている、と、ふとおかしく思うほど、幻は現実まことに、お伽の坊やは、芸妓づれのいやな小父さんになりましたよ。

乗のりこ込んでから、またどうか云う工合で、女たちが二人並ぶか、それを此方こちかから見ると云つた風ふうになると、髪かみの形ばかりでも、菩提樹ぼだいじゆか、石榴ざくろの花に、女の顔した鳥が、腰掛けた如くに見えて、再び夢心に引入れひきいられられましたのでありましようけれど、なかなか、そんな事を云つていられる混雑こんざつ方かたではなかつたのです。

折からの日曜で、海岸へ一日がえりが、群むらり掛かる勢いきおいだから、汽車の中は、さながら野天のてんの蒸風呂へ、衣服きものを着て浸つかったようないりさまで。……それでも、当初はな乗った時は、一つ二つ、席の空いたのがありました。クシヨンは、あの二人ずつ腰を掛ける誂あつらえので、私は肥満でっぷりした大柄の、洋服着た紳士の傍わき、内側へ、どうやら腰が掛けられました。ちようど、椅子を開いて向むか合あに一つ空席あきがありましたので、推されながら、この真中ほどへ来た女たちが、
 (姉さん。)

(まあ、お前さん。)

と讓ゆずりあ合あいながら、その円鬚まるまげの方が、とに角かく、其処へ掛けようとする、

（一人居るんです。）と言った、一人居た、茶と鼠の合の子の、麻らしい……詰襟つめえりの洋服を着た、痩せたが、骨組のしつかりした、浅黒い男が、席を片腕で叩くのです。叩きながら上着を脱いで、そのあいた処へ匆はねました。——さいわい斜はす違かいのクシヨンへ、姉は掛ける事が出来ましたし、それと背中合せに、妹も落着いたんです。御存じの通り、よっかかりが高いのですから、そのいちようがえし銀杏返ぎんぎょうがえしは、髪も低い……一寸ちよつと雛箱へ、空色天鵝絨びろうとどの蓋をし、た形に、此方こつちから見えなくなる。姉の円鬚えんすばかり、端正きちんとして、通とおりを隔むかてて向合むかいあつたので、これは弱よつた——目顔めがおで串じょうだん戯ごも言えない。——たかだか目的地まで三時間に足りないのだけれど、退屈だなど思いましたが、どうして、退屈などと云う贅沢は言っ

ていられない、品川でまた一もみ揉込んだので、苦しいのが先に立ちます。その時も、手で突張つたり、指で弾いたり、拳で席を払いたり、（人が居るです、——一人居るですよ。）その、貴下……白襯衣君の努力と云つてはなかつた。誰にも掛けさせまいとする。……大方その同伴は、列車の何処かに知合とでも話しているか、後架にでも行つてるのであろうが、まだ、出て来ません。このこみ合う中で、それとも一人占めにしようとするのか知ら、些と怪しからんと思ううちに、汽車が大森駅へ入った時です。白襯衣君が、肩を聳やかして突立つて、窓から半身を乗出したと思うと、真赤な洋傘が一本、矢のように窓からスポリと飛込んだ。白襯衣君がパツとうけて、血の点滴るばかりに腕へ留めて

抱きました、色の道には、あの、スパルタの勇士の趣がありましたよ。汽車がまだ留らない間の早業でしてなあ。」

俊之君は、吻と一息を吐いて言った。

「敏捷い事……忽ち雪崩れ込む乗客の真前に大手を振って、ふ

わふわと入って来たのは、巾着ひだの青い帽子を仰向けに被

った、膝切の洋服扮装の女で、肱に南京玉のピカピカしたオ

ペラバツクと云う奴を釣って、溢出しそうな乳を圧えて、その片

手を——振るのではない、洋傘を投げたはずみがついて、膂力

が留まらなかつたものと考えられます。お定りの、もう何うにも

ならないと云つた大な尻をどしんと置くのだが、扱いつけている

と見えて、軽妙に、ポンと、その大な浮袋で、クシヨンへ叩きつ

けると、赤い洋傘こうもりが股へ挟まったように捌けるさば、そいつを一ひとけ蹴りけつて黄色な靴足袋くつたびを膝でよじつて両脚を重ねるのをキツカケに、ゴム靴の爪さきと、洋傘こうもりの柄をつつく手がトントンと刻んで動く、と一いつしよ所に、片肱を白襯衣しろしやつの肩へ掛けて、円まるまる々しい頤あごを頬杖もたで凭せかけて、何と、危く乳首だけ両方へかくれた、一面はだに寛はだげた胸をずうずうと揺ゆすつて、（おお、辛度しんど。）と故わざとらしい京弁で甘つたれて、それから饒舌しゃべる。のべつに饒舌しゃべる……黄色い歯の上下に動くのと、猪首いくびを巾着帽子ふちの縁つちで突くのと同時なんです。

二の腕えりから、頸えりは勿論、胸の下までべた塗の白粉おしろいで、大切な女はだえの膚はだえを、厚化粧で見せてくれる。……それだけでも感謝しなけ

ればなりません。^{あまつさ}剩え貴い血まで見せた、その貴下、^{あなた}いきれを吹きそうな鳩尾^{みずおち}のむき出た処に、ぽちぽちぽちと蚤^{のみ}のくつた痕がある。

——川崎を越す時分には、だらりと、むく毛の生えた頸^{くび}を垂れて、白襯衣君の肩へ眉毛まで押着けて、坐睡^{いねむり}をはじめたのですが、俯向けじやあ寝勝手^{ねがって}が悪いと見えて、ぐらぐら首を揺るうちに、男の肩へ、斜^{はす}に仰向け状^{あおのさま}にぐたりとなった。どうも始末に悪いのは、高く崩れる裾ですが、よくしたもので、現^{うつつ}に、その蚤の痕をごしごし引搔^{ひっか}く次手^{ついで}に、膝を振^ねじ合わせては、ポカリと他人^{ひと}の目の前へ靴の底を蹴^け上げるのです。

男の方は、その重量^{おもみ}で、窓際へ推^{おし}曲^{ゆが}められて、身体^{からだ}を弓形^{ゆみなり}

に堪たえて納なまつている。はじめは肩かたを抱だ込んで、手てを女おんなの背せ中ちゆうへまわしていました。……膚はだいきれと、よつかかりの天鵝びろうど絨じゆうで、長くは暑あつさに堪たりますまい。やがて、魚いさなを仰あ向けにしたような、ぶくりとした下腹したばらの上うへで涼すずませながら、汽車きしやの動揺どうごに調子てうしを取とって口笛くちふえです。

娑婆しやばはこのくらしいにして送うりたい、羨うらやましいの何なにのと申まして。

私は目めの遺場やりばに困まどりました。往來かうらいの通かも、ぎつしり詰つつて、まるで隙間ひてがらがないのです。現いまに私の頭あたまの上うへには、緋手絡ひてがらの大円鬚おおまるまげが押被おしかぶさつて、この奥おくさんもそろそろ中腰ちゆうごになつて、坐睡いねむりをはじめたのです。こくりこくりと遣はなるのに耳みみへも頬ほへもばらばらとおくれ毛かかが掛かつて来る。……鬢びんのおくれ毛かかが掛かるのを、とや角かく

言つては罰の當つた話ですが、どうも小唄や小本こほんにあるように、
 これがヒヤリと参りません。べとべとと汗ばんで、一ひとすじ条かかる
 と濛もつとします。ただし、色白で一寸ちよつと、きれいな奥さんでしたが、
 えらい子持だ。中を隔てられて、むこうに、海軍帽子の小児こどもを二
 人抱いて押されている、脊のひよろりとしたのが主人らしい。そ
 の旦那の分と、奥さん自身のと、——私は所在なさに、勘定をし
 ましたが、小児こどもの分を合わせて洋傘こうもり九本は……どうです。
 さあ、事ここに及んで、——現実の密度が濃くなつては、円まるま
 鬚げと銀杏いちようがえし返の夢の姿などは、余りに影が薄すぎる。……消
 えて幽霊しまになつて了つたかも知れません。

(清涼薬……)

と、むこうで、一寸ちよつと噪はしやいだ、お転婆てんぱらしい、その银杏返ぎんぎよひの聲がすると、ちらりと瞳が動く時、顔が半分無理に覗いて、フフンと口許で笑いながら、こう手が、よっかかりを越して、姉の円鬢えんぼんの横へ伝つたつて、白く下りると、その紙づつみを姉が受けて、子持の奥さんの肩の上から、

(清涼薬きりやうやくですつて。……嘸さぞお暑い事ことで。……)

と、腹の上で揺れてる手を流ながしめ、晒あに見て、身を引きました。

私は苦笑をしながら、ついぞ食べつけない、レモン入りの砂糖を舐なめました。——如何いかに、この動作で、その二人おんなの婦おんながやつと影を顕あらわし得た気がなさりはしませんか。

時に、おなじくその赤い蝙蝠こうもり——の比翼ひよくの形を目と鼻さきの前に

しながら、私と隣合つた年配の紳士は、世に恐らく達人と云つて可い、いや、聖人と言いたいほどで。——何故と云うと、この紳士は大森を出てから、つがいの蝙蝠が鎌倉で、赤い翼を伸して下りた時まで、眠り続けて睡ねむっていました。……

真ほんとう個こに寝ていたのかと思うと、そうではありません。つがいが飛んだのを見ると、明あきらかなこに眼を活かして、棚のパナマ帽を取つて、フツと埃を窓の外へ弾はじきながら、

(御窮屈でございましたらう……御迷惑で。)

澄まして挨拶をされて、吃びっくり驚して、

(いや。どう仕つかまつりまして。)

と面ひまくらう隙すきに、杖ステッキを脇わき挟ばさんで悠然と下車しましたから。」

俊之君は、ここで更に居いづまい坐を直して続けた。……

五

「お話のいたしようで、どうお取りになったか知れないのであります。私が、私は紳士に敬意を表するとともに、赤い蝙蝠こうもりにも、年と児しごこの奥さんにも感謝します。決して敵意は持ちません。そのいづれの感化であつたかは自分にも分りません。が、とに角、その晩、二人の婦おんなと、一ツ蚊帳に……成なりたけ離れて寝ましたから。

——さあ、何時頃だつたでしょう——二度めに、ふと寝苦しい暑さから、汗もねばねばとして目の覚めましたのは。——夜中も、

その沈み切った底だつたと思います。うつうつしながら糠ぬかに咽むせるように鬱陶うつとうしい、羽虫と蚊の音が陰いんに籠こもつて、大蚊帳の上から庄おしつ附けるようで息苦しい。

蚊帳は広い、大いのです。

廻まわりえん縁の角座敷の十五畳一杯に釣

つて、四五ヶ所釣つりを取つてまだずるり——と中だるみがして、三

つ敷いた床の上へ蔽おほいかかつて、縁へ裾こぼが溢こぼれている。私には珍

しいほどの殆ほとんど諸侯道具だいまようどうぐで。……余り世間では知りませんが、

旅宿やどが江戸時代からの旧家だと聞いて来たし、名所だし、料理旅は

籠たごだししますから、いずれ由緒あるものと思われる、従つて古い

のです。その上、一面に嬰兒あかごの掌てほどの穴だらけで、干潟の蟹の

巢ねのように、ただ一ひとかわ側かただけでも五十破れがあるのです。勿論一ひ

とつびとつぎ
 々 継を当てた。……古麻ふるあさに濃淡が出来て、こう瞬またたきをするばかり無数に取巻く。……このおおあばた大痘痕ぼけの化ものの顔が一つ天井からぬけだ拔出したとなると、可おそろし恐さのために一里ひとさと滅びようと言ったありさまなんです。——ここで一寸ちよつと念のために申しますが、この旅籠屋も、昨年の震災をまぬか免れなかったのに、しかも一棟ひとむね焚やけて、人ひと死しさえ二三人あつたのです——蚊帳は火の粉を被かぶつたか、また、山を荒して、畑に及ぶと云う野鼠が群り襲い、当時、壁も襖も防ぎようのなかつた屋やのうちへ押入つて、散々に喰散らしたのかとも思われる。

女中が二人で、宵にこの蚊帳を釣つた時、

(まあ。)

と浮うつかりしたように姉が云うと、

(お気の毒だわね。)

と思わず妹も。……この両ふたかた方だつて、おなじく手拭浴衣一枚で、生命を助たすかつて、この蚊帳を板にした同然な、節穴と隙間だらけのバラツクに住んでいるのに、それでさえそう言った。

——実は、海岸も大分片よつた処ですから、唯聞いたばかり、絵で見たばかりで様子を知らない。——宿が潰れた上、焚けて人死があつた事は、途中自動車の運転手に聞いて、はじめて知つたのです。

(——それは少し心配だな。)

二人の婦おんなも、黙つて顔を見合せました。

可おそろ恐しい崖崩れがそのままになつていて、自動車が大揺れに煽あおつた処で。……またそれがために様子を聞きたくもなつたのでした。

運転手は悍馬かんばを乗鎮のりしずめるが如くに腰を切つて、昂然こうぜんとして、

(来きたる……九月一日、十一時五十八分までは大丈夫請合います。)

と笑つて言つた。——(八月十日頃の事ですが)——

畜生ふざけ、巫山戯ふざけている。私は……一昨々年——家内をなくしたのでございりますが、連つれがそれだつたらこういう蔑なめた口は利きます

まい。いや、これに対しても、いまさら他よその家うちへとも言いたくない、尤もっとも其家そこをよしては、今頃間貸まがしをする農家ぐらいなものだし

ようから。

(構わない、九月一日まで逗留だ。)

と擬勢ぎせいを示した。自動車は次第に動揺が烈しくなつて乗込みのりこみました。入江に渡した村はずれの土橋などは危なかしいものでした。

場所は逗子から葉山を通つて秋谷あきや、立石たていしへ行く間あいだの浦なんです。が、思つたとは大變な相違で、第一土橋と云う、その土橋の下にまるで水がありません、……約束では、海の波が静しずかにこの下を通つて、志した水戸屋みなとやと云うのの庭へ、大な池に流れて、縁えんさ前きをすぐに漁船が漕ぐ。蘆あしが青簾あおすの筈なんです。処ところが、孰方どつちを向いても一面の泥田、沼ともいわず底が浅い。溝どぶをたたきつけた同然に炎天に湧いたのが汐しおで焼けて、がさがさして、焦げていま

す。……あの遠くの雲が海か知らんと思うばかりです。干潟と云うより亡びた沼ほろです。気の利いた蛙なんか疾くに引越して、のたり、のたりと蚯蚓みみずが雨乞あまごいに出そうな汐筋しおすじの窪地を、列を造つて船虫はいが這まわる……その上を、羽虫の大群おおむれが、随所に固つて濛々もうもうと、舞つているのが炎天に火薬の煙のように見えしました。

半ばひしやげたままの藤棚の方から、すすくとこの屋台おこを起して支えた、突支棒つつかいぼうの丸太まるたごし越に、三人広縁に立つて三方に、この干からびた大沼を見た時は、何だか焼原やけはらの東京が恋しくなつた。

贅沢だとお叱ちんなさい。私たちは海へ涼みに出掛けたのです。

(海には汐まんかんの満干があるよ、いまに汐がさすと一面の水になる

。

折角せつかく、楽たのみにして、嬉おんしがつて来た女なれん連れんに、氣きの毒どくらし

くつて、私わがが言い訳わけらしくそう言いますと、

（嘸さぞようござんしようねお月夜げつやだったら。）

姉あねの言いつた事ことは穩おだやかです。

些ちと跳はねものの妹いもうとのをお聞ききなさい。

（雪ゆきが降ふるといい景色けいしきだわね。）

ほんとう

真まこと実まことの事ことで。……これは決きして皮肉くわにくでも何なにでもありません。成

程ほどここへ雪ゆきが降ふれば、雪ゆき舟ふねが炭たん団だんを描えいたようになりましよ

う。

それも、まだ座敷ざしきが極きまつたと言いうのではなかつたので。……こ

この座敷には、蜜柑みかんの皮だの、キヤラメルの箱だのが散ばつて、小児こどもづれの客が、三崎へ行く途中、昼食ちゆうじきでもして行つた跡あとをそのままらしい。障子はもとより開放あけはなしてありました。古襖こふすがたてつけの悪いままで、その絵の寒山かんざん拾得じつとくが、私たちを指ゆびさして囁き合っている体ていで、おまけに、手から抜出ぬけだした同然に箒ちりが一本立掛たてかけてあります。

串戲じょうだんにも、これじゃ居たたまらないわけなんです、些ちつとも気にならなかつたのは、——先刻さつき広い、冠木門かぶきもんを入つた時——前庭を見越したむこうの縁で、手をついた優しい婦おんなを見たためです。……すぐその縁には、山林局の見廻りでもあろうかと思う官吏風の洋装したのが、高い沓くつぬぎいし脱石だつせきを踏んで腰を掛けて、盆に

ビイルびん籠かごを乗せていました。またこの形は、水戸屋がむかしの茶屋旅籠のままらしくて面白し……で、玄関とも言わず、迎えられたまま、その傍わきから、すぐ縁側へ通つたのですが、優しい婦ひとが、客を嬉しそうに見て、

(お暑うございましたでしょう、まあ、ようこそ、——一寸お休み遊ばして。)

と、すぐその障子の影へ入れる、とすぐ靴の紐を縷かがつていた洋装のが、ガチリと釣銭を衣兜かぶしへ掴つか込んで、がっしりした洋傘こうもりを支ついて出て行く。……いまの婦おんなは門外もんそとまで、それを送ると、入違いに女中が、端近はしぢかへ茶盆ちawanを持って出て、座蒲団をと云つた工合で?……うしろに古物こぶつの衝立ついたてが立って、山鳥やまどりの剥製はくせいが覗

いている。——処へ、三人茶盆を中にして坐つた様子は、いまに
 本堂で、志すしようりよう精靈の読経が始りそうで何とも以て陰気な処へ、
 じとじと汗になるから堪りません……そこで、掃除の済まない座
 敷を、のそのそして、——右の廻縁へ立つた始末で。……こう塩
 辛い、大沼を視めるうちに、山下の向う岸に、泥を食つて沈んだ
 小船の、舷ふなばたがささらになつて、鯉ならまだしも、朝日奈が取組
 合あつた鰐わにの頤あごかと思うのを見つけたのも悲惨です。

山出しの女中が来て、どうぞお二階へ、——助かった、ここで
 翌朝あすまで辛抱するのかと断念あきらめていたのに。——いや、階子段はしごだん
 は、いま来た三崎街道よりずつと広い、見事なものです。三人撒
 いたように、ふらふらと上ると、上り口のまた広々とした板敷を、

縁側へ廻る処で、白地の手拭の姉さんかぶりで、高^{たか}箒^{ほうき}を片手に纏^{たすき}がけで、刻^{きざみ}足^{あし}に出て行逢^{ゆきあ}ったのがその優しい婦^{おんな}で、一^{ちよつ}寸^と手拭を取って会釈しながら、軽くすり抜けてトントンと、堅^あい段を下りて行くのが、あわたたしい中にも、如何^{いか}にも淑^{しとや}かで登^あしおとやわらこ音が柔^{ようす}うございました。

何とも容^{ようす}子のいい、何処かさみしいが、目鼻立^{だち}のきりりとした、帯^{おび}腰^{こし}がしまっていて、そして媚^{なまめ}かしい、なり恰好は女中らしいが、すてきな年増だ。二十六七か、と思つたのが——この水戸屋の娘分——お由紀さんと言うのだとあとで分りました。

——また、奇^み異^{よう}なものを見ました——

貴下あなたには、矢張りやっば唐突だしぬけに聞えましようが、私には度々の事で。
 ……何かと申すと——例の怪しい二人の婦おんなの姿です。——私が湯
 から上りますと、二人はもう持参の浴衣に着換きかえていて、お定きまり
 の伊達巻だてまきで、湯殿へ下おります、一人が市松で一人が独とっこ鉗こ……それ
 も可いい、……姉の方の脱いだ明石あかしが、沖合の白波に向いた欄干てすりに、
 梁はりから衣紋竹えもんだけで釣つつて掛けてさぼしてある。裾すそにかくして、薄
 い紫のぼかしになった蹴出けだしのあるのが、すらすら捌さばくように、
 海から吹く風にそよいでいました。——午後二時さがりだったと
 思います。真日まひなか中で、土橋にも浜道にも、人一人通りません。が、
 さすがに少し風が出ました。汗が引いてスツと涼しい。——とそ
 の蹴出けだしの下に脱いで揃そろえた白足袋が、蓮……蓮には濟すままないが、

思うまま言わして下さい。……白蓮華びやくれんげの荅つぼみのように見えませんでした。同時に、横の襖らんまに、それは欄間らんまに釣つつて掛けた、妹の方あかしの明石あかしの下に、また一ひとしほ絞ひとしほりにして朱鷺色ときいろの錦紗きんしゃのあるのが一輪の薄紅い蓮華に見えます。——東京駅を出て、汽車で赤蝙蝠あかこうもりに襲われた、のちこの時まで、（ああ、涼しい。）と思えたのは、自動車はすたで来る途中、山谷戸やまやとの、路傍はすたに蓮田はすたがあつて、白いのが二三輪、ひでり早ひでりにも露を含んで、紅蓮こうれんが一輪、むこうに交つて咲いたのを見た時ばかりであつたからです。

また涼しい風さつが颯さつと来うすものました。羅うすものは風よりも軽い……姉の明石あかしが、竹すべをすべとると、さらりと落ちたが、畳とまれもしないで、煽あおつた襟ほつそをしめ加減ほつそに、細ほつそりとなつて、脇とあけも採とれながら、フツと宙

を浮いて行く。……あ、あ、と思ううちに、妹のが誘われて、こ
う並んでひらひらと行く。後のの裾すそが翻かえつたと見る時、ガタリと
云つて羅の抜けたあとへ衣紋竹が落ちました。一つは擦くすくられるよ
うに、一つは抱くようにと、見るうちに、床とこわきへ横に靡ないて両
方裾すそを流ながしたのです。

私は悚然ぞっとした。

ばかりではありません。ここで覚めるのかと思う夢でない所を
見ると、これが空蟬うつせみになつて、二人は、裏の松山へ、湯どのか
ら消失きえうせたのではなからうか——些ちと仰ぎよう山さんなようであるが真ま
個つたく……勝手を知つた湯殿の外まで密そつと様子を見に行つたくらい
です。婦おんなの事で、勿論戸は閉めてある。妹の方の笑声が湯氣こもに籠

つて、姉が静しずかに小桶を使う。その白い、かがめた背筋と、桃色になつた湯の中の乳ちのあたりが、卑さもしい事だが、想像さうかされて。……ただし、紅白の蓮華が浴する、と自讃こうかして後架あしおとの前から急にあしおとを立たてて、二階みはらしの見み霽はらしへ歸かりました。

や、二人の羅らが、もとの通り、もとの処かかに掛かつてゐる、尤もつとも女め中ちゆうが来て、掛かけ直なしたと思おえば、それまでなんですけうが、まだ希けう有うな氣きがしたのです。

けれども、午飯ひるのお詔あつらえが持も持も出だされて、湯上ゆじやうりの二人と向むか合あう、こち鯛たいのあらいが氷こに乗のつて、小蝦こえびと胡瓜もみあが揉も合あつた処こを見みれば無な事じなものです。しかも女おんな連なれんはビールを飲のむ。ビールを飲のむももなし、鬼おにもなし。おまけに、（冷蔵庫れいさぐらじやないわね。）そ、そん

な幽霊があるもんじゃありません。

況いわんや、三人、そこへ、ころころと昼寝なんぞは、その上、客も、

芸妓もない、姉も妹も、叔母さんも、更に人間も、何にもない。

暮くれがた方、またひつたりと蒸伏むしぶせる夕ゆうなぎ風になりました。が、折

から淡うつつりと、入江の出岬でさきから覗いて来る上汐あげしおに勇気づいて、土

地で一番景色のいい、名所の丘だと云うのを、女中に教わって、

三人で出掛けました。もう土橋の下まで汐が来ました。路みちみち々、

唐とうきび黍畑そうも、おいらん草そうも、そよりともしないで、ただねばりつ

くほどの暑さではありませんでしたが、煙草たばこを買えば（私が。）（あれ

さ、細こまかいのが私の方に。）と女同士……東京子とうきょうこは小遣こづかいを使

ます。野掛け気分のかけきぶんで、ぶらぶら七八町出掛けまして、地震で崩れ

たままの危あぶなかしい石段を、藪だの墓だのの間を抜けて、幾いく腕うねりかして、頂上へ——誰も居ません。葭よし簣ず張はりの茶店が一軒、色の黒い皺しなびた婆さんが一人、真黒な犬を一匹、膝ひざに引ひつけていて、じろりと、犬と一いっしょ所に私わたしたちを視ながめましたつけ。……

この婆さんに、可い厭やな事を聞きました。——

……此処で、姉の方が、隻かた手てを床しょうぎ几きについて、少そし反り身みに、

浴衣腰を長くのんびりと掛けて、ほんのり夕ゆう靄もやを視みめている。

崖がけ縁ふちの台たいつきの遠と目め金かねの六尺ばかりなのに妹あねが立たち掛かった処は、

誰も言うた事ですが、広ひろ重しげの絵えをそのままの風情でしたが——

婆の言う事で、変な気になりました。

目の下の水田みづたへは雁かりが降りるのだそうです。向うの森の山寺に

は、暮六つくれむの鐘が鳴ると言う。その釣鐘堂も崩れました。右の空には富士が見える。それは唯深い息づきもしない靄です。沖も赤く焼けていて、白帆の影もなし、折から星一つ見えません。

（御覧じやい、あないにの、どす黒くへりを取った水際から、三反も五反と、沖の方へさ汐の干た処へ、貝、蟹の穴からや、よきによきと蘆あしが生えましたぞい。あの……蘆がつくようでは、この浦は、はや近うちに、干上つて陸おかになるぞいの。そうもござりましよ。……去年の大地震で、海の底が一体いったいに三尺がとこ上りましての、家々の土地つちじめん面が三尺たたら踏んで落込みましたもの、の。いま、さいて来た汐も、あれ、御覧じやい。……海鼠なまこが這うようにちよろちよると、蘆間あしまをあとへ引きますぞいの。村中が心

を合せて、泥どろ浚せうをせぬ事には、ここの浦は、いまの間に干潟まになつて、やがて、ただ茫ぼう々ぼうと蘆ばかりになるぞいの。……)

何だか独ひとりごと言ことのように言つて聞かせて、鏝茶釜さびちやがまに踞しゃがんで、ぶつぶつ遣やるたびに、黒犬の背中を擦さすると、犬が、うううう、ぐうぐうと遣る。変に、犬の腹から声こゑを揉もみだ出すようで、あ、あの婆さんの、時々ニヤリとする齒が犬に似ている。薄暮うすくれあい合あひに、熟じつとしている犬の不気味さを、私は始めて知りました。……

(——旦那様方が泊らつしやつた、水戸屋がの、一番に海へ沈んだぞいの。)

靄いらかの下に、また電燈の光を漏らさない、料理旅籠はたごは、古家ふるいえの葺いらかを黒く、亜鉛屋根トタンが三面うつつに薄りと光つて、あらぬ月の影を宿し

たように見えながら、縁えんも庇ひさしも、すぐあの蛇へびのような土橋つちばしに、庭に吸すわれて、小さな藤棚ふじだまの遁にげようとする方かたへ、大おく傾かいているのでした。

(……その時は、この山の下からの、土橋つちばしの、あの入江いりえがや、もし……一面いちめんの海うみでござったがの、轟ごうと沖おきも空そらも鳴なって来きると、大地ちがひも波なみも、一いち齊じきに箕みで煽あおるように揺ゆれたと思おもわつしやりました。……あの水戸屋みづとの屋根やねがの、ぐしやぐしやと、骨ほね離はなれの、柱はしら離はなれで挫ひげしゃての——私わたしらは、この時雨しぐれの松まつの……)

と言いいました。字あざの傘かさのように高たかく立たって、枝えだが一本いっぴん折おれて、崖たけへ傾かいているを指ゆびさして、

(松まつの根ねに這すいが縫ぬって見みましたがの、潰つぶれた屋むねの棟むねの瓦わの上うへへ、

いっ
 一ちさきに、何処の犬やら、白い犬が乗りましたぞい。乾してあ
 った浴衣が、人間のようにな、ぱっぱつと欄干てすりから飛出とびだして、湯の
 中へへばりつく。もうその時は、沖まで汐が干たぞいの。ありや
 海さかさまが倒たになつて裏返つたと思ひましたよ。その白犬がの、狂きちがい気
 になつたかの、沖の方へ、世界の涯はてまでと駈出かけだすと思ふ時、水戸
 屋の乾いぬいの隅へ、屋根へ抜けて黄色な雲が立ちますとの、赤旗がめ
 らめらと搦からんで、真黒な煙がもんもんと天井まで上りました。男
 衆も女衆も、その火を消す間まに、帳場から、何から、家うちじゆうきり中切
 もりをしてござつた彼あのいえ家のお祖母様が死なしやつた。人の生命いのち
 を、火よりさきへ助けければ可よいものと、村方むらかたでは言うぞいの。
 お祖母様が雛児ひよこのように抱いてござつた小児衆も二人、一いっしょ所に

死んだぞの。孀やもめつづきの家で、後家御ごけごは一昨年おとしなくなりました……
娘さんが一人で、や、一気に家を装立もりたてていさっしやりますよ。
姉さんじゃ。弟どのは、東京の学校さ入っていさっしやるで。……
：地震の時は留守じやったで、評判のようないは姉娘でござりま
すよ。——家うちとおのれは助かつても、老としより人小児こころを殺いてはもう
のう黒犬を、のう、黒犬や——……

勝手にしろ。殺したのではない、死んだのである。その場合に、
圧おしに打たれ、火に包まれたものと進退をとにもするのは、助ける
のではない、自殺をするのだ、と思いました。……私は可厭いやな事
を聞いた、しかし、祖母と小さい弟妹を死なせて水戸屋を背負つ
て生残いきのこったと言う娘分、——あの優しい婦おんなが確しかにと、この時直

覺的に知りましたが——どんなに心苦しいか……この狭い土地で、嘸さぞ肩身が狭かろう。——胸のせまるまで、いとしく、可憐あわれになつたのです。

（可厭な婆さん……）

（黒犬が憑いてるようね。犬も婆ばばあのようだったよ。）

石段を下りかかつて、二人がそう云つた時、ふと見返ると、坂の下したぐち口に伸掛のしかかつて覗いていました。こんな時は、——鹿は贅むし沢だ。寧ろ虎の方が可いい。礫つぶてを取つて投げようとするのを二人に留とめられて……幾つも新しい墓がある——墓を見ながら下りたんです。

時に——（見たいわね。）妹なぞもそう言つたのですが、お由

紀さんは、それ切姿きりを見せなかつたのです。

大分話が前後あとさきになりました。

ところ

処で、真夜中に寝苦しい目の覚めた時です。が、娘分に対しても決して不足を言うんじやあない。……蚊帳のこの古いのも、穴だらけなのも、一層いっそうお由紀さんの万事最惜いとさを思わせるのですけれども、それにしても凄まじい、——先刻さつきも申した酷ひどい継つぎです。隣室となりには八畳間が二つ並んで、上下ただ広びい家うちに、その晩はまた一組も客がないのです。この辺に限らず、何処でも地方は電燈が暗うございますから、顔の前に点いていても、畳の目がやつと見える、それも蚊帳の天井に光っておればまだしも、この燈ひに羽虫

の集る事夥多^{おびただ}しい。何しろ、三方取巻いた泥沼に群れたのが蒸^む
 込^{しこ}むのだから堪^{たま}りません。微細^{こまか}い奴は蚊帳の目をこぼれて、むら
 むら降^{ふりかか}懸るものですから、当初^{はな}一旦寝たのが、起^{おきあ}上^あって、妹
 が働いて、線を手繰^{たぐ}って、次の室^まへ電燈を持って行つたので、そ
 れなり一枚開^あけてあります。その襖越しにぼんやりと明^{あかり}が届く、
 蚊帳の裡^{なか}の薄暗さをお察し下さい。——鹿を連れた仙人の襖の南
 画も、婆と黒犬の形に見える。……ああ、この家^{うち}がぐわしやぐわ
 しやと潰^{つぶ}れて乾^{いぬい}の隅から火が出た、三人の生命^{いのち}が梁^{はり}の下で焼けた
 のだと思つと、色合と言ひ、皺^{しわ}と言ひ、一面の穴と言ひ、何だか、
 ドス黒い沼の底に、私たち倒れているような気がしてなりません。
 (ああ、これは尋常^{ただごと}事でない。)

一体小児の時から、三十年近くの間——ふと思い寄らず、二人
いっただいしども
 の婦の姿が、私の身の周囲へ躡あられて、目に遮る時と云うと、善
おんな
 にしろ、悪いにしろ、それが境遇なり、生活なりの一転機となる
 のが、これまでに例を違たえず、約束なのです。とに角、私の小
からだ
 い身体一つに取って、一時期を劃かくする、大切な場合なのです。

(これは、尋常事でない。……)

私は形に出る……この運命の映うつしえ絵に誘われていま不思議な処
 へ来た——ここで一生を終るのではないか、死ぬのかも知れない。
 枕も髪も影になつて、蒸暑さに沓脱くつぎながら、行儀よく組くみちが違
 えた、すんなりと伸びた浴衣の裾を洩もれて、しつとりと置いた姉
 の白々とした足ばかりが燈ひの加減に浮いて見える。白い指をすツ

すツと刻んで、瞳をふうわりと浮いて軽い。あの白蓮華をまた思
 いました。

取とりすが継つつて未来を尋ねようか、前世の事を聞こうか。――

と、この方は、私の隣ほうに寝ている。むこうへ、一嵩ひとかさ一寸低ちよつと
 く妹が寝ていました。

……三分……五分……

紅い蓮華がちらちらと咲いた。かすか幽こすかに見えて、手首ばかり、夢で
 蝶を追うようなのが、どうやら此方こつちを招くらしい。……

――抱きしめて、未来を尋ねようか。前世の事を聞こうか。――

招く方へは寄よりやす易やすい。

私は、貴方、巻まきた 葎たばこの火を消しました。

その時です。ぱちぱちと音のするばかり、大蚊帳の継つぎ穴あなが、何百か、ありつたけの目になりました。——蚊帳の目が目になつた、——否いえ、それが一つ一つ人間びとの目なんです。——お分りになり憎にくうございませうか知ら。……一いちど 斉せきに、その何十人かの目が目ばかり出して熟じつと覗のぞいたのです。睜みはる、瞬またたく、瞳ひとみが動く。……馬鹿々々しいが真ま個たくです。睜みはる、瞬またたく、瞳ひとみが動く。……として覗のぞいています。暗い、低い、大天井ばかりを余して、蚊帳の四方は残らず目です。

私はすくんで了しまいました。

いや、すくんでばかりはおられません。仰向けに胸しっかへ緊しっか乎かと手

を組んで、りようがん両眼を押睡おしつむつて、気を鎮めようとしたのです。

三分……五分——十分——

魔は通つて過ぎたろうと、堅く目を開きますと、——鹿と仙人が、ばば婆と黒犬に見える、——その隣室となりの襖際と寢床の裾——皆が沖の方を枕にしました——裾の、袋戸棚との間が、もう一ヶ所かよ通で、裏階うらほしご子へ出る、一人立ひとりだちの口で。表二階の縁と、広く続いて、両方に通かよいぐち口のあるのが、何だか宵から、暗くて寂さびしゅうございました。——いま、その裏階子の口の狭い処にぼツと人影が映さして色の白い婦おんなが立ちました。私は驚きません。それは円まるま鬚げの方で……すぐ銀杏返いちようがえしのが出る、出て二人並ぶと同時に膝をついて、駒下駄を持つだろう。小児こどもの時見たのと同じようだ。

で、蚊帳から雨戸を宙に抜けて、海の高へ通るのだらうと思ひました。私の身に、二人の婦おんなの必要な時は、床とこばしら柱しらの中から洋燈ランプを持つて出て来た事さえありますから。」……

「ははあ。」

著者は思わず肱ひじを堅くして聞いたのであつた。

六

「——ところ処ところがその婦おんなは一人きりで、薄いお納戸色の帯に、幽かすかな裾模様が、すつと蘆あしの葉のように映りました。すぐ背を伸ばせば届きます。立つて、ふわふわと、凭よりかかるようにして、ひつたりと

蚊帳に顔をつけた。ああ、覗く。……ありたけの目が、そのところへ寄つて、爛々らんらんとして燃えて大蛇おろちの如し……とハツとするまに、目がない、鼻もない、何にもない、艶々つやつやとして乱れたままの黒髪の黒い中に、ペろりと白いのつぺらぼう。――

「……………」

著者は黙つて息を呑んで聞いた。

「うう、と殺されそうな声を呑むと、私は、この場合、婦二人おんな、生命いのちを預る……私は、むくと起きて、しにみに覚悟して、蚊帳を刎はねた、その時、横ゆれに靡なびいて、あとへ下さがつたその婦おんなが、気にお圧おされて遁にげ状さまに板敷を、ふらふらとあと退すきりに退すきるのを夢中で引ひつとら捉とえようと思いました。胸へ届きそうな私の手が、迂すべるが早い

か、何とも申しようのない事は、その婦は三四尺ひらりと空へ飛んで、宙へ上った。白百合が裂けたように釣られた両足の指が反つて震えて、素足です。藍、浅葱、朱鷺色と、鹿子と、絞と、紫の匹田と、ありたけの扱帯、腰紐を一つなぎに、夜の虹が化けたように、婦の乳の下から腰に絡わり、裾に擲んで。……下に膝をついた私の肩に流れました。雪なす両の腕は、よれて一条になつて、裏欄干の梁に釣した扱帯の結目、ちようど緋鹿子の端を血に巻いて縋っている。顔を背けよう背けようと横仰向けに振つて、よじつて伸ばす白い咽喉が、傷々しく伸びて、蒼褪める頬の色が見る見るうちに、その咽喉へ隈を薄く浸ませて、身悶をするたびに、踏処のない、つぼまった蹴出が乱れました。

凄いとも、美しいとも、あわれとも、……踏台が置いてある。目鼻のない、のっぺらぼうと見えたのは、白地の手拭てぬぐいで、顔の半ば目かくしをしていたのです。」

俊之君は、やや、声忙せわしく語った。此処で吻ほっと一息した。

「いま、これを処置するのに、人の妻であろうと、妾であろうと、娘であろうと、私は抱取だきとらなければなりません。」

私は綺麗なばけものを、横抱きに膝に抱いて助けました。声を殺して、

(何をなさる。)

扱帯しづきで両膝は結ゆわえていました。けれども、首をくくるのに、目隠をするのは可訝おかしい。気だけでも顔を隠そうとしたのかと思う。

いや、そうでないのです。それに、実は死のうとしたのではない。私から遁にげようとしたので、目を隠したのは、見まい見せまいじやあない。蚊帳を覗くためだったのだから余程よっぽど変です。」

七

「前後のいきさつで、大抵お察しでありましょう。それはお由紀さんでございました。」

もうしにく
申 憎にくうございますけれども、——今しがた、貴方の御令ごれいけ
い 閨いのお介添かいぞえで——湯殿へ参っております、あの女なのです。

これでは……その時の私と、由紀とのうけこたえに、女のもの
 いいが交りましたは、尚なお申憎うございますから、わけだけを、
 てっとりばや
 手取早く。……

由紀は、人の身の血も汐も引くかと思う、干潟に崩くずれ家やを守り
 つつ、日も月も暗くなりました。……村の口の端は、里の蔭かげ言、
 目も心も真暗になりますと、先せん達だつて頃から、神棚、仏壇の前に
 坐つて、目を閉じて拜む時、そのたびに、こう俯うつむ向く……と、衣き
 ものの縞しまが、我が膝が、影のように薄うすりと浮いて見えます。それ
 が毎日のように度たび重かさなると段々だんだんに判はつきり然見える。姿見のない
 処に、自分の顔が映るようで、向うが影か、自分が影か、何とも
 言えない心細い、寂さびしい気がしたのだそうです。緋かすりは那そんな様でない、

縞しまの方が、余計にきつぱりとしたのが、次第に、おなじまで、映る事になつたと言います。ただ、神仏の前にぬかずく時、——ほかには何の仔細もなかつた。

ところ

処が当日、私たちの着きますのが、もう土橋のさきから分つたと言うのです。それは別に気にも留とめなかつた。黄昏たそがれに三人で、

時雨しぐれの松の見み霽はらしへ出掛けるのを、縁の柱で、悄しよんぼり乎と、藤棚

越こに伸のび上あがつて見ていると、二人に連れられて、私の行くのが、

山ではなしに、干潟を沖へ出て、それ切きり帰らない心持がしてならなかつた。無事に山へ行きました。——が、遠目とおめがね金を覗くのも、

一人が腰を掛けたのも、——台所ひっこへ引込んでまでもよく分る。それとともに、犬婆さんが、由紀の身について饒舌しゃべるのさえ聞える

ようで。……それがために身を恥じて、皆の床の世話もしなかつた。極きまりの悪い、蚊帳の所せ為いばかりではないと言います。夜の進むに従つて、私たちの一挙一動がよく知れた。……

三人が一ひと寝入ねいりしたでしよう、うとうととして一度目を覚ます、その時でした。妹の方が、電燈を手た繰ぐつて隣の室へ運んでいたのは。——（大変な虫ですよ）と姉は寝ながらものう懶うそうに団扇うちわを動かす。蚤のみと蚊で……私かゆも痒かゆい。身からだ体じゆう中、くわツといきつて、堪たまらない、と蚊帳を飛出とびだして、電燈の行つたお隣へ両腕まくを捲まつて、むずむず搔かきながら、うっかり入ると、したたかなものを見ました。頭から足のさきまで、とろりと白あぶらい膏らのかかつたはり切れそうな

膚はだなんです。蚤ふるを振ふるつて脱はないでいたので。……電燈の下へ立派に
 立つて、アハハと笑いました。（抱くと怪我をしてよ。……夏虫
 さん——）（いや、どうも、弱った。）と襖の陰へ、晩に押し
 置いた卓子台ちゃぶだいの前へ、くつたりと小さくなる。（生憎あいにく、葉が
 ）と姉が言うと（香水をつけて上げましょう、かゆいのが直る
 わよ。……）と一気にその膚で押し出して、（どうせお目に掛け
 たんだ、暑さしの凌しのぎ。ほほほほ。）袋戸棚から探つて取つた小罫を
 持つて、胸の乳、薰かおつてひつたりと、（これ、ここも、ここも、
 ここも。）虫のあとへ、ひやひやと罫の口で接吻キッスをさせた。

ああ、この時は弱つたそうです。……由紀は仏間に一人、蚊帳

に起きて端正きちんと坐つて、そして目をつぶつて、さきから俯向いて一人居たのだそうですが、二階の暗がりには、その有様が、下の奥から、歴ありあり々と透いて見えたのですから。——年は長たけても処女なんです。どうしていいか分らない。あつちへ遁にげ、此方こつちへ避よけ、ただ人の居ない処を、壁に、柱に、袖をふせて、顔をかくしたと言いうじやありませんか。

私は冷い汗を流した、汗と一いっしょ所に掌てのひらに血が浸にじんだ。——帯も髪も乱れながら、両膝しつかめわを緊しつ乎結わえている由紀を、板の間に抱いたまま、手を離そうにも、頭かぶりをふり、頭を掉ふつて、目を結えたのをはずしませんから、見くびつて、したたかくい込んでいた蚊の奴が、血をふいてぼとりと落ちたのです。

私は冷くなつて恥じました。けれども、その妹も、並んだ姉も、ただの女、ただの芸妓に、私が扱ひ得なかつたことは、お察し下さるだろうと存じます。

——痒かゆさは、香水で立たちどころ 処ところ に去りましたが、息が詰つまる、余り暑いから、立つて雨戸を一枚繰くりました。(おお涼しい。いいき勢おに乗じて、妹は縁の真正面へ、蚊帳の黒雲を分けたように、乳を白く立ったのですが、ごろごろ、がたん。間遠まじおに荷車の音が、深夜の寂せき寞ぼくを破つたので、ハツとかくれて、籐椅子とういすに涼すんだ私の蔭かげに立ちました。この音は妙に凄あうございました。片輪車かたわぐるまの変化へんげが通とるようで、そのがたと門にすれた時は、鬼おにが乗込のりこむ気け

勢はがいしました。

姉がうつとりした声で、（ああ、私は睡ねむい。……お寝よ、いいからさ。）（沢山たんとおつしやいよ。）余り夜が深い。何だか、美しい化鳥けちようと化鳥が囁ささいているように聞えた。（あ、梟ふくろうが鳴いている。）唯一はるかつ、遥さつきに、先刻の山の、時雨しぐれの松のあたりで聞えました。

この、梟が鳴き、荷車の消えて行く音を聞いた時、由紀は、その車について、戸外おもてへ出で了ちま了ちまとおうと思つたと言います。しかし気がついた。いま外へ出れば、枝を探り、水を慕もつて、屹きつと自殺をするに違ちがいない。……それが可恐おそろしい。由紀はまだ死にたくない

未練があると思つたそうです。——真個まっこうです、その時戸を出たらば魔まに奪とられたに相違ありません。

私たちも凄かつた。——岬も、洲すも、潟も、山も、峰の松も、名所一つずつ一ヶ所一体の魔まが領りょうしているように見えたのですから。(天狗様でしょうか、鬼でしょうか、私わたいたちとはお宗旨違いだわね。引込ひっこみましよう可こ恐わいから。)居ゐかわつて私の膝ひざにうしろ向きにかけていた銀杏いちょうがえし返かへが言つたのです。

由紀は残らず知つていました。

それから、私も余よつぽど程ほど寝苦しかつたと見えます——先にお話

しした二度めに目を覚ましますまで、ものの一時間とはなかつた
そうで——由紀の下階したから透とおして見たのでは——余り判明はつきり見え
るので、由紀は自分で恐ろしくなつて、これは発狂するのではな
いかと思つた。それとも、唯、心で見ると迷いで、大蚊帳の裡なかの模
様は実際とまるで違つているかも知れない。それならば、まよい
だけで、気が違うのではないであらう。どつちか確たしかめるのは、自
分で一度二階へ上つて様子を見なければ分らない。が深く堅く目
を瞑つぶつていると思いつつ……それが病気で、真個ほんとうは薄目を明け
ているのかも計はかられない、と、身だしなみを、恥かしくないまで
に、坐つてカタカタと箆笥をあけて、きものを着かえて、それか
ら手拭てぬぐいで目を結ゆわべて、二階へ上つたのだそうですが、数ある段

を、一ひとあし歩も誤らず、すらすらと上りながら、気が咎とがめて、二三
 度下りたり、上ったり、……また幾いくたび度、手で探つても、三重みえに
 も折つた手拭はちゃんと顔半分蔽おおうている。……いよいよ蚊帳を
 覗くとなると、余りの事に、それがこの病氣の峠で、どんな風に、
 ひきつけるか、気を失うか、倒れるかも分らない。その時醜みにくくな
 いようにと、両膝をくくつたから、くくつたままで、蚊帳まで寄
 つて来るのです、間あいだは近いけれども、それでは忍んでは步行あるけま
 すまい。……扱しごき帯つなを繋いで、それに縫すがつて、道成寺どうじようじのつくりも
 ののように、ふらふらと幽霊だちに、爪立つまだつた釣身つりみになつて覗い
 たのだそうです。私に追われて、あれと遁にげる時、——ただたよ
 りだつたのですから、その扱しごき帯ひきたぐを引手ひきたぐ繰つて、飛退とびのこうとしたは

ずみに、腰が宙に浮きました。

浅間あさましい、……極きまりが悪い。……由紀は、いまは生きていられない。

い。——こうしていても、貴方（とはじめて顔を振向けて、）私の抱だている顔も手も皆見える。これが私を殺すのです——と云つて、置おきどころ 処ところのなさそうな顔を背そむける。猿さるぐつわ 轡つわとか云うものよ
り見ても可哀あわれなその面めんぱく縛ばくした罪のありさまに、

（心配なさる事はない。私が見えないようにして上げる。）
と云つて、目めかくし隠かくしの上を一一ふたところ 処ところ吸すつて吸すいました。

貴下あなた、慰なぐさめるにしても、気休いきやすめを言うにしても、何と云う、馬鹿ばかな、可忌いまわしい、呪のろ詛ろつた事を云つたものでしょう。

手拭は取れました。

(あれ、お二方ふたかたが。)

と俯向く処を、今度はまともに睫毛まつげを吸った。——そのお二方ですが、由紀が、唯はばか、憚はばかったばかりではなかつたので。すらすらと表二階の縁はしの端へ、歴々ありありと、円鬚まるまげと銀杏返いちようがえしの顔うなずきが白く、目をぱつちりと並んで出ました。由紀を抱きかくしながら踞うずくまつて見た時、銀杏返の方が莞爾にっこりすると、円鬚まるまげのが、頷うなずきを含んで眉を伏せた、ト顔も消えて、衣きものばかり、昼間見た風の羅うすものになつて、スーッと、肩をかさねて、階子段はしごだんへ沈み、しずみ、トントントンと音がしました。

二人のその婦おんなの姿は、いつも用が済むと、何処かへ行つて了しまうのが例なのです。

しかし、姉も妹も、すやすやと蚊帳に寝ていた事は言うまでもありません。

ただ不思議な事は、東京へ帰りましてからも、その後時々逢いますが、勝手々々で、一人だったり、三人だったり、姉と妹と二人揃って立った場合に出会わなかったのでございます。

——少々金の都合も出来ました。いよいよ決心をして先月……

十月……再び水戸屋を訪ねました時、自動車タキシイが杜戸もりと、大きくずれ、

秋谷を越えて、傍道わきみちへかかる。……あすこだったと思う、紅こうれ

蓮んが一茎ひとえだ、白蓮華びやくれんげの咲いた枯田かれたのへりに、何の草か、幻の

露の秋草の畦あぜを前にして、崖の大巖おおいわに抱かれたように、巖窟いわむろ

に籠こもったように、悄乎しよんぼりと一人、淡くたたずイんだ婦おんなを見ました。

(やあ、水戸屋の姉さんが。)

と運転手が言いました。

ひらりと下りますと、

(旦那様——)

知らせもしないのに、今日来るのを知って、でむかえ出迎に出たと云

つて、手にすが縋つて、あつい涙で泣きました。今度は、すずし清い目をひら睜

いても、露のみあふ溢れて、私の顔は見えない。……

由紀は、急な眼病で、目が見えなくなりました。

——結婚はまだしませんが、所帯万事ひきう引受けて、心ばかりは、

なぐさめの保養に出ました。——途中から、御厚情を頂きます。

……ああ、帰って来ました。……ごれいけい御令閨が手をお取り下すつ

て、」

と廊下を見つつ涙ぐんで。

「髪も、化粧も、為して頂いて……あの、きれいな、美しい、あわれな……嬉しそうな。」

と言いかけて、無邪気に、握にぎりこぶし拳こぶしで目をおさ圧おさえて、渠かれは落らく涙くるいしたのである。

涙はともに誘われた。が、聞えるスリツパの躡あしおと音おとにも、そのふたりおんな（二人の婦）にも、著者にとつては、何の不思議も、奇蹟も殆ほとんど神秘らしい思いでないのが、ものたりない。……

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 泉鏡花集 黒壁」ちくま文庫、筑摩書房

2006（平成18）年10月10日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十二卷」岩波書店

1940（昭和15）年11月20日第1刷発行

初出：「女性」

1925（大正14）年1月号

※「拵える」に対するルビの「こしら」と「あつら」の混在は、底本通りです。

※表題は底本では、「甲《きのえ》乙《きのと》」となつていま
す。

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2017年8月25日作成

2017年9月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

甲乙 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>